

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：47120

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03005

研究課題名（和文）服従実験関係者（実験者・教師役・生徒役）の行動に対する目撃者の認知

研究課題名（英文）Witnesses' perceptions of the behavior of those involved in the obedience experiment (experimenter, teacher, and student)

研究代表者

釘原 直樹 (Kugihara, Naoki)

東筑紫短期大学・食物栄養学科・特別研究員

研究者番号：60153269

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：観察者の目に映った、命令者（実験者役）、服従者（教師役）、被害者（生徒役）の3者の姿を分析した。過去の服従行動の研究は人がいかに権威に弱いのかを明らかにした。本研究は視点を変えて、第三者がこのような状況をどのように解釈するのかに注目した。実験群（過去に行われた実験では65%ないし80%の人が450Vの電撃を与えたと知らせる）と、そのような情報を与えない統制群が設定された。評価者が自分を教師役と想定した場合の電撃投与量は統制群より実験群の方が多かった。また行動原因を当事者の特性よりも状況に帰属する傾向が高かった。パーソナリティ評価変数と電撃量の関連も見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジェノサイドといった悪魔のような所業を行った人物に対して、性格や特性にその原因を帰属すれば、事件や現象全体が簡単に説明可能であるうえに、自分たち（第三者）の善が再確認できるというメリットがある。これが根本的帰属錯誤(fundamental attribution error)の主な原因である。本研究は服従実験の一部始終を提示することにより、このようなバイアスが教師役だけでなく、実験者や生徒役に対しても生じるのか、責任配分はどのようになるのかについて分析した。この実験は戦後の軍事裁判の解釈や戦争責任の問題にも関係するものと思われる。さらに児童虐待のフレームに置き換えた場合についても検討した。

研究成果の概要（英文）：We analyzed the observers' view of the three targets: the commander (as the experimenter), the submissive (as the teacher), and the victim (as the student). Past studies of obedience experiments have revealed how vulnerable people are to authority. This study changed the perspective and focused on how observers interpret these situations. An experimental group (instructed that 65% or 80% of those in previous experiments gave 450 V electric shocks to the victim) and a control group that was not given such information were set up. When the observers assumed that they were the teachers, the electric shocks level was higher in the experimental group than in the control group. There was also a higher tendency to attribute the cause of the behavior to the situation rather than to the characteristics of the participants. An association between personality evaluation variables and the amount of electric shocks was also found.

研究分野：社会心理学

キーワード：服従行動 命令者 犠牲者 第三者 道徳 原因帰属

1. 研究開始当初の背景

申請者は2013年に日米の服従率について比較する実験を行った。実験方法はBurger(2009)の追試研究とほぼ同一であった。比較対象となるアメリカのデータはMilgram(1974)のexperiment5 (base condition)とBurger(2009)のものを用いた。申請者が行った実験の服従率は150Vの地点で92% (14人中13人が服従)となりアメリカのデータより若干高い傾向が伺えた。第2の目的は実験中や実験後の実験参加者の言説を分析することであった。分析の結果、生徒役健康状態に関する発言を80%以上の参加者が行って、仕事を遂行しなければならないプレッシャーと被害者に対する心配の間の葛藤に苦しんでいることがわかった。本研究で見出された服従率は若干米国で行われた実験結果より高いが、全般的には日米の主要な先行研究の結果をほぼ支持するものであり、服従行動の文化や時代を超えた頑健性が明らかになったと言える。

さらにこの研究で明らかになったのは、実験参加者の関係者に対する責任配分についてである。Milgramの実験では実験者、自身(教師役)、生徒役に対する配分はそれぞれ、38.40%、36.30%、25.30%であった。それに対して申請者らが行った実験では33.85%、36.15%、30.00%となり、両実験ともほぼ同じであった。この結果は責任が大体、平等に配分されることを示している。一方、申請者が行った実験における参加者の実験中と実験後の発言の分析を行ったところ、自身の責任に言及した割合は64%であり、実験者64%、生徒役21%となった。それから生徒役に対する心配・同情に関連する言及が93%、課題遂行の責任への言及は100%であった。この結果が示しているのは実験者や生徒に対する義理と人情の板挟みになった参加者の姿であった。ただし、上記のいずれの結果も参加者自身が、実験終了後のdebriefing時に回答したものであり、第三者の評価ではなかった。

2. 研究の目的

本研究では実験の当事者ではなく、第三者が責任の帰属をどのように行うのか、また根本的帰属錯誤のような現象が生起するのか否かについて服従実験場面を使用することによって検証した。言葉を変えれば、戦中の人々の行動の分析から、戦後評価へ、当事国の人々の行動分析から、それを眺める外部の人間の評価へ視点を転換するものである。ただし、服従者の評価に関する研究はこれまでいくつか行われている。例えばReeder, Monroe, and Pryor (2008)は第三者に教師役の行動の原因、特性、動機、状況の影響などについて回答を求めている。研究の結果、予想に反して、第三者は教師の行動に影響した状況の影響をきちんと認識していることが明らかになった。また特性や動機や状況といった複数の要因が原因解釈に複合的に影響していることも示された。

ただし、上記の研究は専ら服従者の行動に焦点を当てたものであった。それに対して本研究は実験者や生徒役にも注目する。命令者や被害者をどのように認識するかは服従者の認識に影響するものと思われる。本研究ではこの3者の特性、動機、状況に関する目撃者の評価が互いどのように関連しているのかを明らかにした。

3. 研究の方法

本研究は第1(に服従実験の関係者(命令者、服従者、犠牲者)の行動を第三者がどのように認識し、そしていかに状況やパーソナリティに原因帰属を行うかを明らかにした。そのために服従実験の手続きと様子がわかる申請者が行った実験のビデオのいくつかを提示して、評価してもらった。ビデオの中で、生徒役は75Vから30V上昇する毎に「うっ」と叫び、120Vで「おい、これ本当に痛いよ」という発言をするが、150ボルトの時点で明確に「実験を離脱したい」と主張する。具体的には「うっ、先生、もう耐えられません。ここから出してください。心臓がわるいと言ったでしょう。心臓がドキドキしてきています。もうこれ以上続けたくありません。もうやめます。お願いだから出してくれ」という発言をする。このような様子がビデオで提示された後、実験参加者に「なぜこの3者はそのような行動をしたのか」という質問に自由記述で回答してもらった。それから、ビデオ動画の中の出演者3名(実験者、教師役、生徒役)のパーソナリティ評定、出演者の行動に関する状況への帰属の程度の評定、3者への責任配分割合、評定者自身がどの程度のショックを与えるのかの予測などであった。実験条件としては65%の人が450Vまで電気ショックを与えたという情報を与えた条件(65%情報条件)と80%の人が450Vまで電気ショックを与えたという情報を与えた条件(80%情報条件)、さらにそのような情報が与えられなかった条件(統制条件)を設定した。具体的には次のような説明をした(80%情報条件の場合)。この実験は学習に及ぼす罰(電気ショック)の効果に関する実験です。実験を続行しなければ研究が進みません。実験参加の報酬としてあなたは5000円もらっています。もしあなたがこの実験の教師役になったら、次のどのレベルまで実験を続行しますか。左のボルト数の表のどこかに一つ丸をつけて下さい。ちなみに、過去に行われた実験では80%の人が

450 ボルトまで実行しました。

第2に分担者の専門(刑事事件)に近づけた研究を行った。具体的には、分担者が過去に行った児童虐待事件の調査データを再検討した。この研究において、服従実験関係者は虐待した母親(教師役)、DVによって母親を精神的に追い詰めていた父親(実験者役)、子ども(生徒役)にそれぞれ対応し、母親に対する一般市民(目撃者)の罰が分析された。ダミー質問で誤答があった者などを除外したデータ984人分(女性519人、Mage=44.8、SD=14.3)を調べた。

4. 研究成果

第1に服従行動観察実験に関しては次のような結果が見出された。

他者の服従割合の情報を知らせた場合には(知らせなかった統制群に比較して)電気ショック投与量(ボルト数)と各出演者(実験者、教師、生徒)の責任率、各パーソナリティ変数との関連が殆ど見られなくなった。他者情報は服従行動の評価を曖昧にすることが示唆された。

電気ショック投与量平均値に関して、統制条件は142.5V、65%情報条件は257.9V、80%情報条件は225.6Vであった。他者の行動に関する情報が電撃量に影響することが示された。ただし、65%条件と80%条件では差が見だされなかった。

出演者の行動はどの程度、その場の状況(実験室、他者等)に影響されたものなのか、あるいは、出演者自身の性格が行動の背景にあるのかについての回答を求めた。その結果、実験者に関する状況帰属の割合は67.1%であり、教師状況帰属率は64%、生徒状況帰属率は57%であった。この結果から観察者は出演者の特性よりも状況に帰属する傾向が強いことが明らかになった。特に実験者や教師に関してはその傾向が顕著であることが示された。

教師役が電気ショックを与えたことに関する出演者それぞれの責任の割合の評価を求めた。その結果、統制群に関しては、実験者57.6%(電撃量との相関-0.39)、教師役33%(電撃量との相関-0.04)、生徒役9.3%(電撃量との相関0.71)であった。この結果から観察者は実験者の責任を最も重く考え、教師の責任は3割に過ぎなかった。さらに実験者の責任を重く見る場合は電撃量が少なくなり、生徒の責任を重く見る場合は電撃量が多くなることも示された。

各出演者のパーソナリティ(15項目)を因子分析した結果次のような因子が見いだされた。実験者(リーダーシップと一貫性、攻撃的で無責任、温和で知性的)、教師役(リーダーシップと一貫性、攻撃的で無責任、知性と温和、従属性)、生徒(リーダーシップと知性、攻撃的で無責任、従属性)

統制群に関して、電撃投与量とパーソナリティ評価変数の相関は以下の通りであった。実験者が野心的で攻撃的(0.40)、実験者が自己中心的で無責任(0.42)、教師が従属的で影響を受けやすい(0.37)。実験者が攻撃的で自己中心的かつ教師が従属的と評価した参加者は自分の電撃投与量も多くなると考えた。

上記の結果から、服従実験の観察者は自分が当事者になった場合、特に半数以上の人が最後まで命令に従ったという情報が与えられた場合、自分も200V以上のショックを他者に与えるかもしれないと判断していることがわかった。そしてその判断は主に状況に影響されたものであり、責任は主として実験者にあると考えていることも明らかになった。また各出演者のパーソナリティ評価はポジティブな次元としてはリーダーシップや一貫性、知性や温かさなどがあり、ネガティブな次元としては攻撃的で無責任、従属性などが見いだされた。実験者や教師のネガティブな側面に注目している観察者ほど予想される自分の電撃投与量が多くなると評価する傾向があることが示された。

自由記述としては以下のような内容が典型的なものであった。「生徒役の人が痛がって悲鳴をあげているのに実験を続行できる人の神経を疑います。私だったら心が痛むので、そんなに長く実験を行えないです。報酬のお金はいらないので、実験をすぐにやめさせると思います。」「450ボルトまで実験を続行した人が半数以上いるのは驚いたし怖いと思いました。実験前に30ボルトのショックを体験したとはいえ、それから15倍もある450ボルトまで続行する勇氣は私にはないです。お金をもらっているから、私が続行しなければ研究が進まないとは言え、隣の部屋から聞こえるうめき声や叫び声に耐えられないと思うし、実験開始前に顔を合わせた人が自分の判断で痛みを受けている状況に耐えられないと思います。450ボルトまで続行した人の中には自分が受けるわけではないから、相手は知らない人だからという思いがあるのではないかと。また実験者の言葉への影響もあるのではないかと。匿名であつたり知らないという状況で人間の思考の怖さが見えてくると思いました。」「電気ショックは危険だけど450ボルトの実験くらいをしないと研究がわからないから450ボルトにしました。実験参加の報酬で5000円もらっているのもあり、高いボルトの450ボルトにしたのもあります。あと、過去にも行われた実験でも65%の人が450ボルトまで実行しているので同じ450ボルトまでした方がいいのではないかと考えたからです。」

第2に児童虐待事件に関しては、母親に対する罰と理由とで興味深い「食い違い」が見られた。具体的にいうと、目撃者視点では「かわいそうな母親を教育して立ち直らせるべきだ」とする(教師役に対する寛大な)理由はもっとも重きをおかれていたが、罰の重さとはほとんど関係がなかった。代わりに、「母親を懲らしめる必要がある」といった厳しい理由が罰の重さと関係

していた。これらの結果から、服従実験を児童虐待のフレームに置き換えた場合は、実験者役による影響が建前上は理解されていても実際にはやはり実行役の教師役に非難が集中することが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Daiku, Y., Kugihara, N., Teraguchi, T., & Watamura, E.	4. 巻 15 (3)
2. 論文標題 Effective forewarning requires central route processing: Theoretical improvements on the counterargumentation hypothesis and practical implications for scam prevention	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLoS ONE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0229833	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高原 龍二・釘原 直樹	4. 巻 32
2. 論文標題 モノレール緊急停止時の適切な案内方法の検討: チャネルと案内間隔を要因としたシミュレーション実験	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 産業・組織心理学研究	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 武藤 麻実・釘原 直樹	4. 巻 18
2. 論文標題 青年期の学生を対象とした障害者に対する社会的距離の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 対人社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高原 龍二・釘原 直樹	4. 巻 34
2. 論文標題 ワンマン運転の鉄道におけるトラブル対処チェックリストの有効性の検討: モノレール乗務員を対象としたシミュレーション実験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 産業・組織心理学研究	6. 最初と最後の頁 115-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32222/jaiop.34.2_115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Fa, H. & Kugihara, N.	4. 巻 13
2. 論文標題 Does concern about death help to increase donations for environmental charities? Examining the impact of mortality salience on pro-environmental behaviors in East Asia.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Organizational Innovation	6. 最初と最後の頁 175-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Fa, H. & Kugihara, N.	4. 巻 46
2. 論文標題 How Collective and Personal Mortality Salience Impacts Antagonism against Worldview-Threatening Others.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Death Studies	6. 最初と最後の頁 1276-1281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/07481187.2020.1796842	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ako Agata, Kaori Ando, Yu Kasagi, & Naoki Kugihara	4. 巻 -
2. 論文標題 Seeking Harmony Rather Than Efficiency: The Effect of Self-Construal on Social Compensation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12399	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 村上 幸史・植村 善太郎・釘原 直樹
2. 発表標題 マスクミが対象とするスケープゴートの変遷 (26) COVID-19とSARSの比較から
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植村 善太郎・村上 幸史・釘原 直樹
2. 発表標題 マスクミが対象とするスケープゴートの変遷(27) 日本におけるスペイン・インフルエンザ流行時の新聞報道の様態
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 釘原直樹・綿村英一郎
2. 発表標題 服従実験の教師役の行動に対する目撃者の認知 教師役の服従率に関する情報の影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大工泰裕・内田遼介・寺口司・綿村英一郎・釘原直樹
2. 発表標題 社会的望ましさを排除した体罰容認度を測定する潜在的指標の開発：ST-IATを用いた検討
3. 学会等名 日本応用心理学会第86回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高原龍二・釘原直樹
2. 発表標題 モノレール運転士のチェックリスト活用行動の促進 - 運輸指令からの指示に着目して -
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daiku, Y., Agata, A., Sakamoto, R., & Kugihara, N.
2. 発表標題 Does the intensity of social norms affect the degree of conformity to in-group? Observations from field experiments on escalators at train stations.
3. 学会等名 The 19th annual convention of society for personality and social psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 釘原直樹 (田中健吾・高原龍二 編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 産業・組織心理学 Tomorrow 第1章「集団・組織と人の行動(グループ・ダイナミックス)担当	

1. 著者名 釘原直樹 (越智啓太 編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 222
3. 書名 テロリズムの心理学 第4章「集団の光と影」	

1. 著者名 釘原直樹 (大淵憲一 編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 紛争と和解を考える 第1章「拡散する敵意」	

1. 著者名 釘原直樹 (「教師のチカラ」編集委員会)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 76
3. 書名 子どもを「育てる」教師のチカラ No. 34 2018年夏号 12-13	

1. 著者名 綿村英一郎 (栗本英世, モハーチ・ゲルゲイ, 山田一憲 編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 204
3. 書名 争う 第3章 公判で争う 法の想定を科学的視座から考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

釘原直樹ページ https://sites.google.com/site/kugiharanaoki/home
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	綿村 英一郎 (Watamura Eiichiro) (50732989)	大阪大学・人間科学研究科・准教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------